

三人泣き “語りの会りょうかんさん大本芳子”
昔の話じゃ。

あるとき、お婆さんのところに、街に働き出ている息子から手紙が届いたと。お婆さんは字が読めないので、誰かに読んでもらおうと、手紙を持って家の前に立っていた。そこに侍がやってきた。

「お侍さん、すみませんが、この手紙を読んでくださいませんか」「よし、よし」

侍は手紙を見ていたが、しばらくして、しくしくと泣き出したお婆さんが、「息子に変わったことでもあると書いてありますかな」と尋ねるが、侍は黙って泣くばかりじゃと。

おばあさんは、息子に悪いことがあったに違いないと思って大声を上げて泣き出した。

そこに瀬戸物売りがやってきて、二人が泣いているのを見て、泣き出した。

次にやってきた人が、三人が泣いているので何が起こったのかと瀬戸物売りに尋ねたのじゃ。「なんで泣

いておられるのかな」「じつは、このあいだ商売に出て茶碗やお皿を落として割ってしまったのじゃ。その時は忙しくて、泣く暇がなかったが、みんなが泣いているのを見て思い出し、泣いているのじゃ」

そこで、お婆さんにたずねたと。「お婆さんなんで、そんなに泣いているのかな」

「お侍さんに手紙を読んでもらったら、泣くばかりするので、息子に悪いことがあったにちがいないと思って、ないておる」次に侍にたずねたと。

「お侍さんは、なぜ泣いておられるのかな」

「お婆さんに読んでくれと言われた、この手紙を読めず、情けないから泣いているのだ。子どもどころ、もっと勉強しとけばよかった。ワーン、ワーン」。そんな話。(立石 おじさんの民話より)